

題目 共感は善き行いを導くのか？

—情動的共感と認知的共感の違いに焦点を当てた探索的検討—

氏名 井桁 真由

指導教員 高橋 伸幸

電車やバスでお年寄りに席を譲るような親切な行いは、他者の利得を増大させる「向社会行動」である。向社会行動は他者の利得を増大させるが、行為者自身の利益は減少させる。向社会行動は、いかにして生じるのだろうか。この問いに対する近接因として、近年「共感」が注目されている。共感には、他者が感じていることを自分でも感じるという「情動的共感」と、他者が感じていることを推論し理解するという「認知的共感」という二つの側面がある。情動的共感は、表情模倣 (Dimberg, 1982) や情動伝染 (Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1992) といった、身体・神経レベルで相手と協調するシステムを基盤として、自動的・無意識的に生起される。このような自動的・無意識的に生起された情動的共感による向社会行動にはリスクを伴うことが指摘されている。Bloom (2016) は、情動的共感にはスポットライト的な性質があり、その対象以外の部分に注意が向かなくなるという負の側面があるとしている。亀田 (2017) も、情動的共感はその対象を「いま、ここ、わたしたち」の範囲に限定してしまいやすく、身近ではない他者と相互作用する現代社会では、向社会行動を実現するに不十分であるとしている。一方で、認知的共感は「誤信念課題」(Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985) を考えるときに活性化する脳の回路を基盤として、自他分離的なプロセスで相手を理解する (亀田, 2017)。認知的共感は情動的共感を調整することが見いだされており (Kameda, Murata, Sasaki, Higuchi, & Inukai, 2012)、向社会行動には認知的共感が重要であると考えられている。このような共感の二つの側面の特徴を踏まえ、本研究では、情動的共感と認知的共感が向社会行動にどのような影響を与えるのかについて、同じ実験状況で直接的に比較した。実験では国内と国外の二つの寄付先に対する寄付行動を測定した。情動的共感を生起させる条件では寄付の対象に関する写真を見せ、認知的共感を生起させる条件では数値的な情報を呈示した。何もしない統制条件と比べて、二つの実験条件で寄付行動がどのように変化するかを検討した結果、情動条件では二つの寄付先の間で寄付行動に差が見られ、情動的共感の持つスポットライト的な性質の負の側面は否定されたが、その向社会行動にはリスクを伴うことが示された。一方認知条件では統制条件との間で寄付行動に有意な差がなく、認知的共感本研究では向社会行動を引き起こす要因とはならなかったため、さらなる検討の必要性がある。